

子牛価格暴落 1頭1100円も

国内の酪農地帯で寒風が吹いている。ウクライナ情勢の影響で飼料代が高騰し、子牛の価格も毎日。冬場はそれほど牛乳の消費が落ち込むないが、酪農家は「東、三重の苦境に立たれると、牛乳のニーズを握り起し」と「懸命にアユールを続けていく」。

熊本空港に隣接する熊本県菊池市場(同県大津町)では、大人の腰ほどの大気の子牛がひしめいていた。酪農家たちがセリ場を駆け込んだタ一を見守るなか、セリ人の声が響く。

「ホルス(タイン)の雄、一千円からです。一千円……ほか、いないですか。一千円」

価値を引きあがむ声は聞こえないまま、次々と子牛が売られていった。熊本市で酪農を営む米野博明さん(52)は歎しかねないもむきをした。

「子牛の価格が暴落している。取材した昨年12月のある日のセリでの値段は、乳用牛・ホルスタインの子牛の雄が1頭あたり平均4万5千円ほど。県畜産業協同組合によれば、半年前の半分ばかりだ。生産状況などによって価値が変わら、最低価格は税込みで1100円まで落ち込んだ。

熊本は西日本唯一の酪農地帯。酪農家によるが、子牛の販売は収入源だった。米野さんは「生乳が歓しいときでも子牛は瘦く売れで、それで生活していかなければいけなかった」と語る。

100万円単位で負担増

じいに下落が顕著なのが、乳用牛の子牛の雄だ。そもそも乳牛は、子牛を産んだ後にお乳を出すようになる。そのため

め、酪農家では一定の数の子牛が生まれ続ける。雄の子牛の場合は乳牛にはなれなくなるため、食肉用となるよう取り出されることが多い。

だが、ウクライナ戦争により、EU(ヨーロッパ)の牧草などの国際価格が上がり、急務相場の影響もあり、飼料代が高騰。むしろ乳用牛は肉の価格水準が高くなれば、飼料代が高くて採算が合わないところ、高騰で販賣額は嵩ががいなくなってしまうところ。

しかし、西日本でも同様で、ホクレン農業協同組合連合会(北海道)によれば、飼料高に畜産大手の畜産も重なり、道内の乳用牛の子牛の価格は一時、平均1万円を切った。牛乳の一大生産地、熊本県菊池市で、JA菊池の酪農部会長を務める森浩一郎さん(54)は「私が酪農をやるためにから、これまでにない状況です」と語る。

森さんの生會では、乳を搾る牛と出産未経験でまだ乳が出ない牛を合わせて2000頭余りが飼料を込んでいた。1頭が1日に食べる量は50kg。1頭あたり1日1500円ほどになった飼料代は、1頭あたり2500円近くになつた。翌年に100万円単位でコストが稼み上がつてしまふかもしれない。

園芸飼料の高騰分の一部補填を盛り込んだ昨年9月の緊急対策に続き、12月にも緊急支援として50億円を計上。乳量が少ない牛など頭数を減らした場合に1頭あたり15万円の補助金を出すことを決めた。

森さんも酪農部会員が多くて地域の旅館などに牛乳を提供、「牛乳で整体を」と呼びかけている。



森浩一郎さん=熊本県菊池市旭志新明

飼料代が高騰、採算合わず低迷 悩む酪農家